

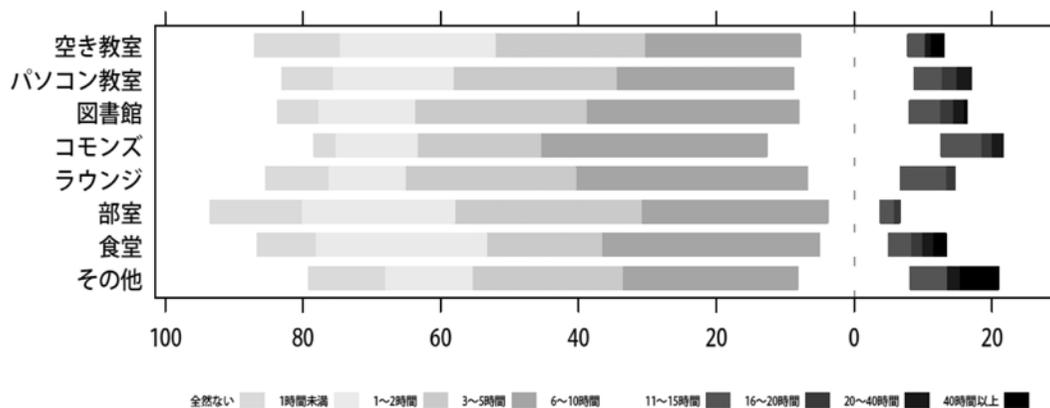
IV 全体のまとめ

今回で18回目となる「カレッジ・コミュニティ調査」ではあるが、前回調査時に調査項目を大幅に入れ替え、学内の諸施策に資するデータを提供するIR調査としての役割を担うことを意識して調査企画がなされた。ここまでは、各質問項目について、回答の分布といくつかの回答者の属性（所属学部、学年、性別、GPA、入試形態、居住形態、所属団体）との関係を中心に主に記述的な分析を紹介してきた。最後に、今回の調査で新しく導入された質問項目を中心に、まとめとしていくつかの調査項目間の関係をより詳しく分析して本報告書を締めくりたい。

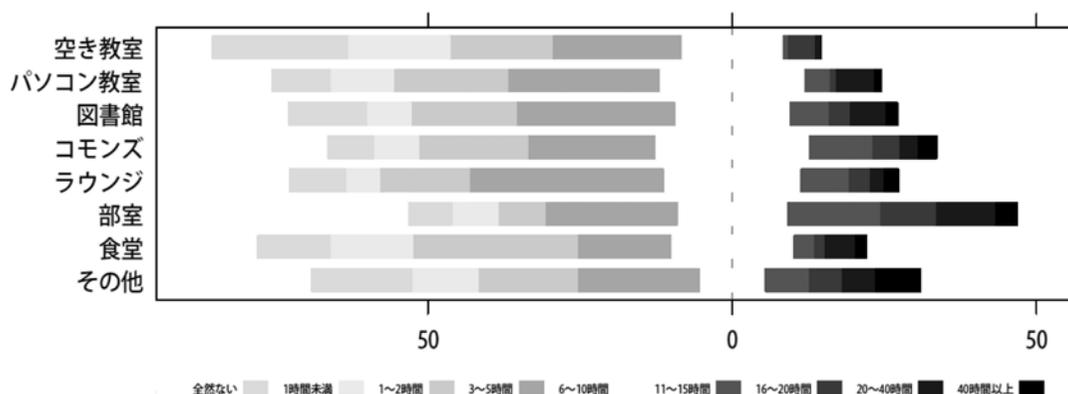
1. コモンズ 授業時間以外の居場所

居場所に関する質問（Q24）は、今回の調査で新たに設けられた質問である。学生の居場所を作る、ということは、ここ数年の重要な大学の施策の一つである。第Ⅱ部では、学部ごとの違いや成績と図書館利用率の関係が確認された。ここでは、居場所ごとの学習時間をみてみよう。図Ⅳ-1-1は、授業時間以外の居場所（Q24）と授業関連の学習（予習・復習・宿題）時間との関係をあらわしている。設けられた選択肢の中では、「コモンズ」（ラーニングコモンズ、アカデミックコモンズ）を選択した回答者がいちばん長時間学習の比率が高いことがわかる。図Ⅳ-1-2は、授業時間を除いて大学に滞在している時間との関係である。部活動の場である部室を除けば、コモンズを選択した回答者がいちばん長時間滞在の比率が高い。夜遅い時間まで利用可能なおえ、飲食可能で比較的自由な使い方が許される空間であるため、コモンズが学生にどのように利用されるのか多少の懸念があったが、この結果をみる限りは自主的な学習にうまく利用されていることが推測される。

図Ⅳ-1-1 授業時間以外の居場所(Q24)と授業関連の学習(予習・復習・宿題)時間(Q3-2)との関係

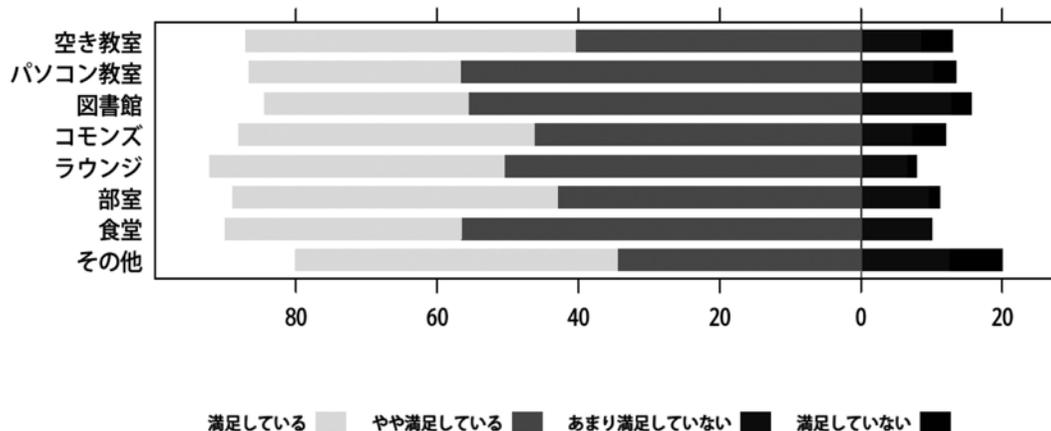


図IV-1-2 授業時間以外の居場所(Q24)と授業時間を除いて大学に滞在している時間(Q3-6)との関係



図IV-1-3は、居場所（Q24）と学生生活満足度（Q1）との関連を示した図である。満足度は全般的に高いが、空き教室、パソコン教室、図書館、コモンズといった学習関係の居場所の中では、コモンズを選択した回答者の満足度がいちばん高い。新しくつくった居場所が学生たちに有効利用され、それが学生生活の満足度を上昇させているのであれば、コモンズの設置は成功であったといえる。ただし、コモンズの収容人数はまだ大きいものではなく、限られた人数しか利用できていない。まだコモンズ施設が無い聖和キャンパスを含め、学生のニーズや利用状況をみながら、よりいっそうの整備が必要である。

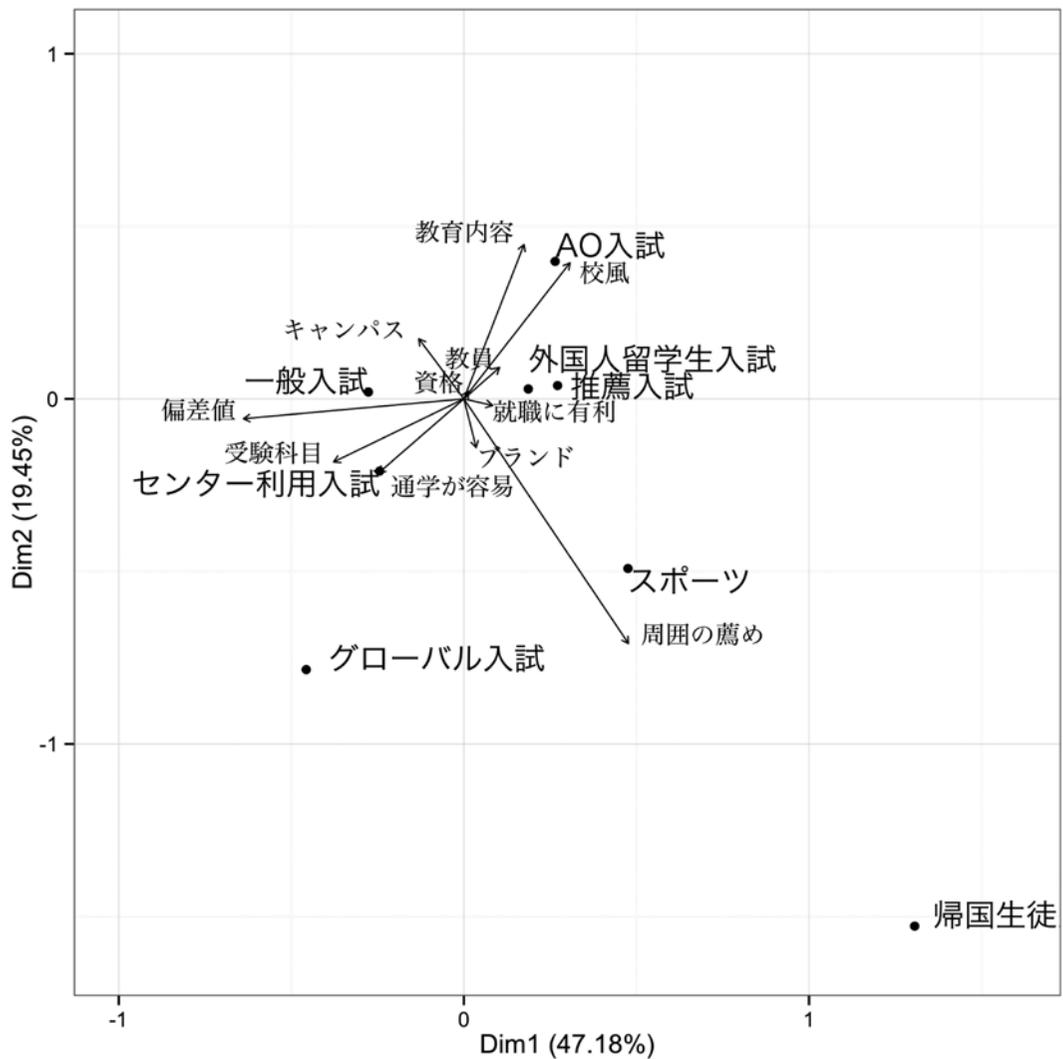
図IV-1-3 居場所(Q24)と学生生活満足度(Q1)との関連



2. 入試形態

入試形態は、前回調査から新たに導入された項目である。前節までの記述的な分析で、しばしば入試形態による回答の傾向の違いが指摘された。ここでも、いくつかの質問項目と入試形態との関係を見てみよう。図IV-2-1は、入試形態（F5）と入学理由（Q11.1）との関係を対応分析にかけたものである。入試形態のカテゴリと入学理由のカテゴリの「距離」を図示している。一般入試やセンター利用入試は「偏差値」「受験科目」「通学が容易」などが近く、AO入試や推薦入試は「教育内容」「校風」などに近い。スポーツ選抜は「周囲の薦め」と強く関連づけられている。入試形態によって、受験時期や高校での学習内容も変わってくるので、こうした差が出るのは理解できる。「ブランド」「資格」「就職に有利」などは中心に位置しており、入試形態による差があまりない。

図IV-2-1 入試形態(F5)と入学理由(Q11.1)との関係



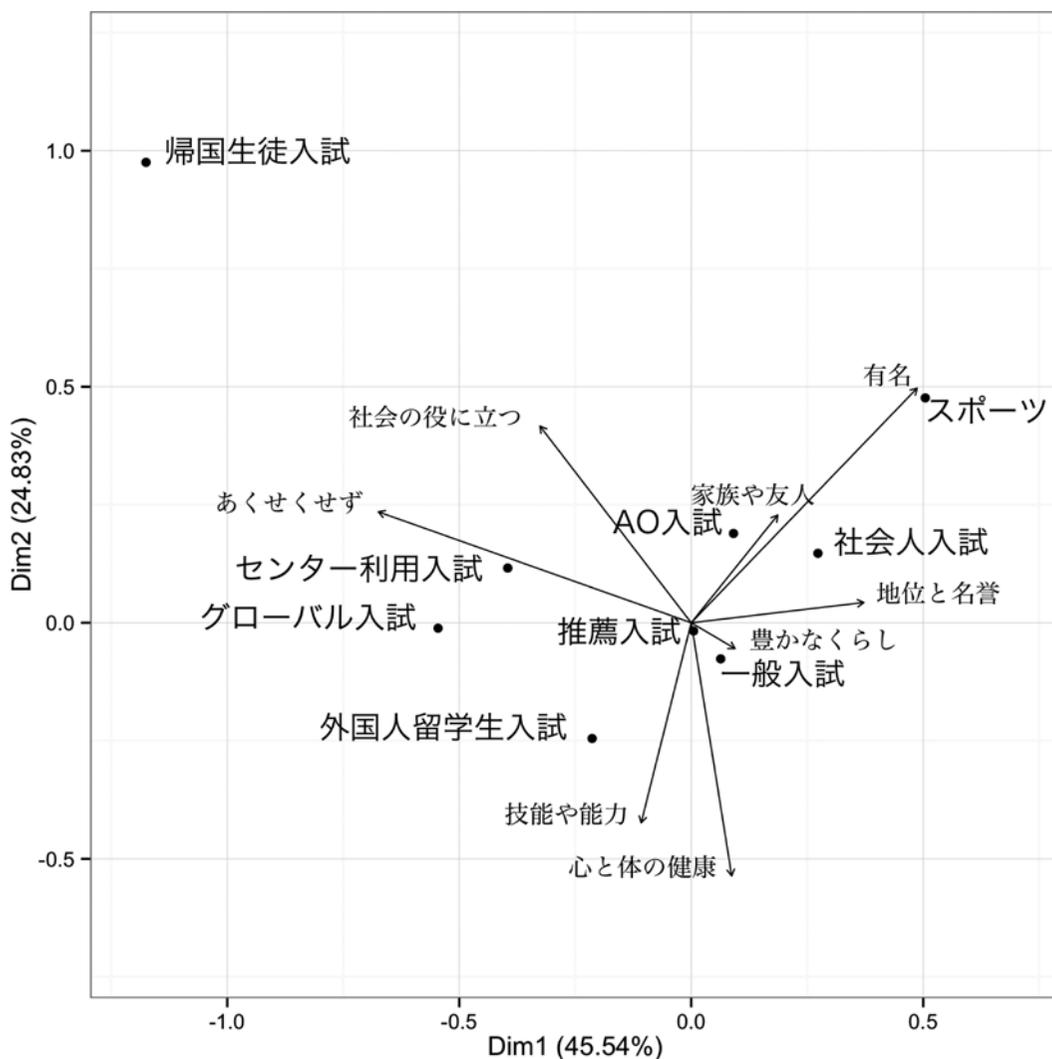
図IV-2-2は、入試形態（F5）と重視する暮らし方（Q14）との関係を対応分析にかけたものである。入試形態のカテゴリと重視する暮らし方のカテゴリの「距離」を図示している。たとえば、ス

ポーツ選抜は「有名になりたい」に近い、センター利用入試やグローバル入試は「あくせくせらず、のんきにクヨクヨしないでくらす」や「社会の役に立つような事をする」に近い。

このように、入学してくる学生は、一つの物差しで測られるものではないということがわかる。それぞれの入試形態には、各学部が設定したアドミッションポリシーがある。どのような学生を入学させる為に実施される入学試験なのかは、入試形態ごとに異なる。そういう意味で、入試形態ごとに異なる回答の傾向がでるということは当然のことで、多様な学生によるコミュニティが形成されている、と肯定的に捉えることができる。異なる経歴やバックグラウンドをもつ学生が集まる事により、お互いを高め合う相互作用が期待される。

しかしながら、自由記述の中には、特定の入試形態に対する苦言を呈するものがいくつかあった。「〇〇入試は学力が低い」「〇〇入試が学生の質を下げる」などといった記述である。入試形態が、そうしたスティグマとして作用する事は好ましい状態ではない。学生たちがそれぞれの存在意義を認め合い、そしてそれぞれの学習効果があがるような環境を作っていく必要があるだろう。

図IV-2-2 入試形態(F5)と重視する暮らし方(Q14)との関係

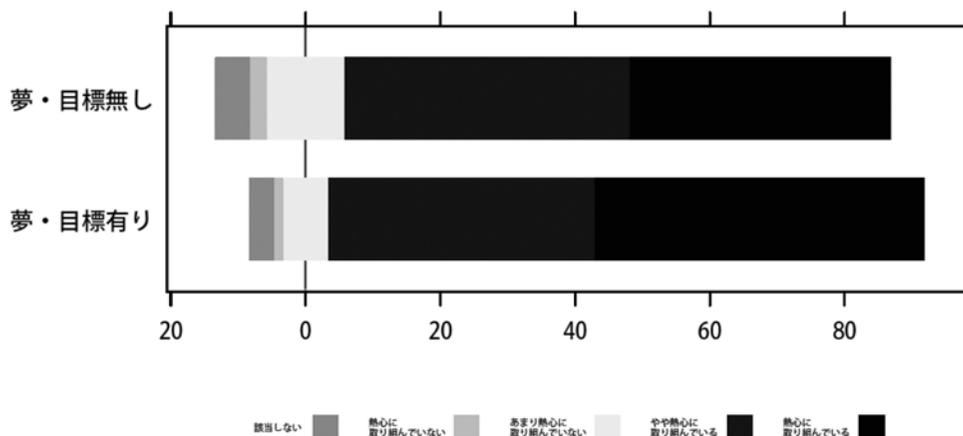


3. 将来の夢や目標

将来の夢や目標を自由記述でたずねたところ、回答者の過半数で具体的な書き込みがあった(Q7)。第Ⅱ部では、夢・目標の書き込みがある回答者とそうでない回答者の違いを、回答者の属性および大学での学びのつながりとの関係で分析した。ここでは、具体的な夢・目標の記述がある方が大学でのまなびとのつながりを見つけることができている傾向が確認された。ここでは、さらに回答者の学習状況など、その他の質問項目との関連をみてみたい。

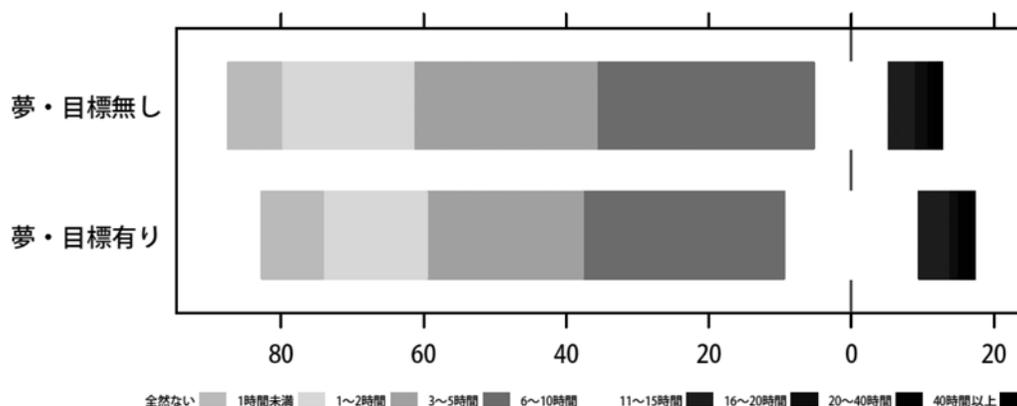
すでにGPAとの関連が確認されているが、授業科目への取り組み方との関連を確認してみる。Q6の質問項目の中で、比較的学年による該当・非該当の影響が少ない「D専門科目」について、その取り組み具合と夢・目標の記述の有無との関連をみたのが図IV-3-1である。図のとおり、具体的記述がある回答者の方が、熱心に授業に取り組んでいる比率が高いことがわかる。

図IV-3-1 「『D 専門科目』の取り組み具合」(Q6)と「夢・目標の記述の有無」(Q7)との関連

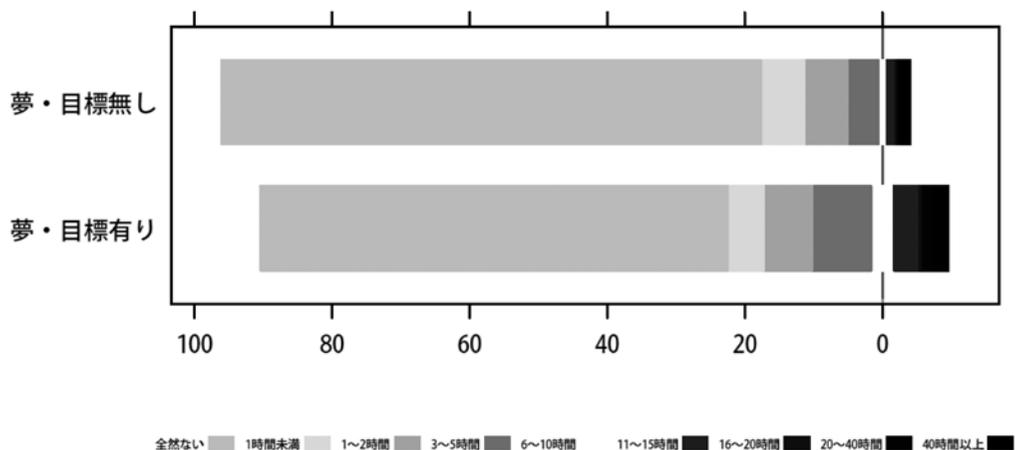


同様に、1週間に費やす時間(Q3)の中で、「(2) 授業関連の学習(予習・復習・宿題)」と夢・目標記述の有無との関連を示したのが図IV-3-2、「(3) 授業外の学習(専門学校など)」と記述の有無との関連を示したのが図IV-3-3である。いずれの場合も、具体的記述がある回答者の方が、学習時間が長い。

図IV-3-2 「(2)授業関連の学習(予習・復習・宿題)」(Q3)と「夢・目標の記述の有無」(Q7)との関連

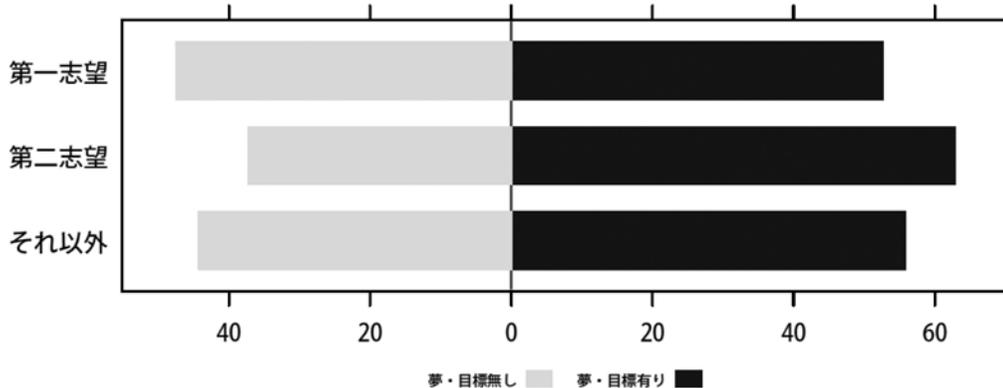


図IV-3-3 「(3)授業外の学習(専門学校など)」(Q3)と「夢・目標の記述の有無」(Q7)との関連



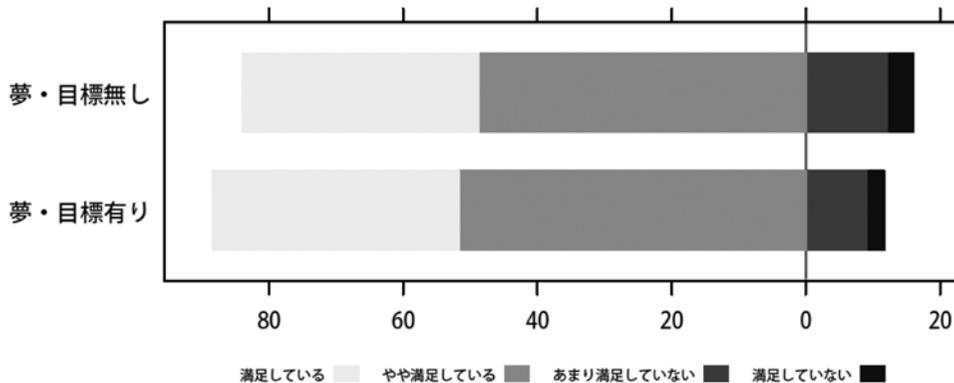
次に、入学時点の項目との関連をみてみよう。図IV-3-4は、関西学院大学の志望度(Q11.2)と具体的記述の有無との関連を示した図である。第一志望、第二志望、それ以外という区分のなかで、第一志望がもっとも具体的記述が少ないという結果になった。

図IV-3-4 「関西学院大学の志望度」(Q11-2)と「夢・目標の記述の有無」(Q7)との関連



さらに、これも今回の調査で新たに導入されたである学生生活の満足度(Q1)との関連が図IV-3-5からわかる。満足度は全般的に高いが、夢・目標の具体的記述がある回答者の方が、満足度が高い傾向にある。

図IV-3-5 「学生生活の満足度」(Q1)と「夢・目標の記述の有無」(Q7)との関連

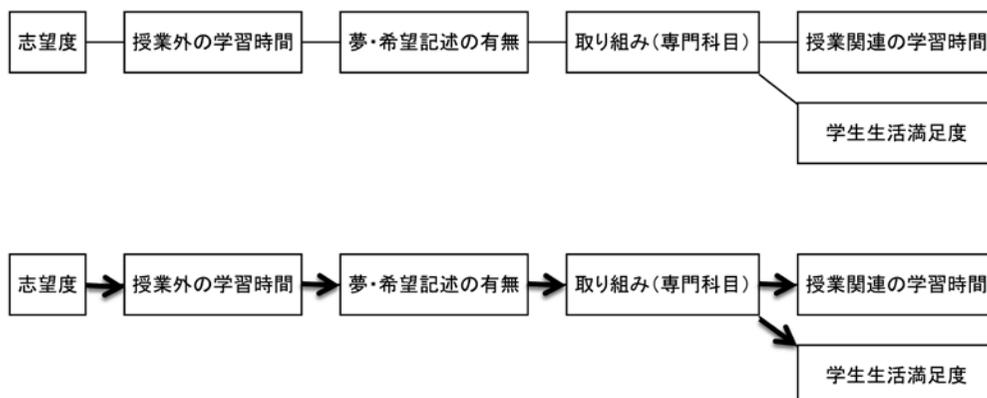


表IV-3-1 6項目の単相関および偏相関の一覧

単相関	夢・希望記述の有無	取り組み(専門科目)	授業関連の学習時間	授業外の学習時間	学生生活満足度
取り組み(専門科目)	0.12				
授業関連の学習時間	0.07	0.20			
授業外の学習時間	0.14	0.01	0.01		
学生生活満足度	-0.04	-0.18	-0.05	0.02	
志望度	0.04	-0.01	0.08	0.13	0.11

偏相関	夢・希望記述の有無	取り組み(専門科目)	授業関連の学習時間	授業外の学習時間	学生生活満足度
取り組み(専門科目)	0.10				
授業関連の学習時間	0.04	0.19			
授業外の学習時間	0.14	0.00	-0.01		
学生生活満足度	-0.03	-0.17	-0.02	0.02	
志望度	0.03	-0.01	0.08	0.12	0.11

図IV-3-6 6項目の因果関係図



以上ここまでの分析から、具体的な夢・目標の記述をする回答者は志望度は低いものの、学習意欲が比較的高く、学生生活に対する満足度も高いということが判明した。もちろん、ここまでの分析は二変数ごとの単純な関係をみただけのものである。そこにどのような因果のメカニズムがあるのかは特定できていない。表IV-3-1は、夢・目標記述の有無、専門科目への取り組み、授業関連の学習時間、授業外の学習時間、学生生活の満足度、入学時の志望度、以上6つの変数間の単相関および偏相関の一覧である。単相関は二変数ごとの関連の方向と強さをあらわし、偏相関はその二つ以外の変数の影響を取り除いた二変数間の関連の度合いをあらわしている。この情報をもとに、変数間の関連の構造を抽出したのが図IV-3-6である。ここで、志望度は入学時点で決まるものであるから、因果的に先行すると仮定すると、図IV-3-6のような因果関係が導かれる。これによれば、志望度が授業外の学習時間に影響し、それが夢・目標の記述を促し、専門科目への取り組みが熱心になり、学生生活の満足度が向上をしたり、授業関連の学習時間が増加するというメカニズムが抽出されたことになる。第一志望でない学生が学外の学習から夢や目標を具体化し、それがさらに学内の専門科目の学習や学生生活への満足度へつながっていく、というストーリーである。第二志望での入学であっても、目標をもって学生生活を過ごすことによって最終的に満足度があがる、ということは肯定的に捉えられる。逆に、第一志望で入学してきても、目標が定まらずに日々を過ごすことは、エンロールマネジメントの観点から好ましい状況とはいえない。夢・希望の記述には、具体的な資格や職業に関するものもあれば、「人の役に立つ」のような暮らし方・生き方に関するような記述もあった。大学側は、入学後の早い段階から学生各自がそうした自分の夢や目標を意識できるようなしかけを用意する必要があるのかもしれない。どのような形であれ、一旦関西学院大学の学生となったからには、各自の夢や目標に向かって学生生活を送ってもらうことが満足度につながっているからである。

4. おわりに

今回の調査の企画・実施には、高等教育推進センターだけでなく、学内の様々な部署からスタッフがあつまってワーキンググループを構成した。本報告書は、各部署が担当する質問項目を中心に記述的な分析を紹介している。このまとめにあるように、複数の質問項目を重ね合わせて分析する事により、各部署の施策の参考になるような結果が出てくるはずである。さらに、過去の調査結果や学内外の他の調査データと比較検討することによって、本学学生の現状と課題がみえてくる。前回調査からIRを意識した調査内容に大きく変更したが、次回以降も調査内容を見直しながらデータを蓄積していく事が重要である。日常の業務における資料として、この調査データが役立てられれば幸いである。

最後に、貴重な時間を割いて調査票に回答してくれた学生対象者の皆さんに感謝の言葉を申し述べておきたい。